

# いざみ

第29号

2009年10月1日発行

(題字: 國松 明日香氏)

## 本郷新彫刻シリーズ 29



《九人の乙女の碑》 稚内市 稚内公園 (高さ1.8m、幅2.4m)

終戦を迎えた直後の1945年8月20日、旧ソ連軍の攻撃を受けた樺太真岡郵便局交換手9人が職場を守り、自決した悲劇を後世に伝える慰霊碑。樺太の島影をはるかに望むこの地に、1963年(昭和38年)8月15日、氷雪の門とともに設置された。本郷新が友人の上田佑子さんの依頼を快諾、制作した。以降、毎年8月20日にこの碑の前で慰霊祭が執り行われている。「九人の乙女たち」(豊田利憲作詞、高橋権四郎作曲)の歌もある。(写真・文 仲野三郎)

## 「いづみ」27号 目 次

|                                       |        |
|---------------------------------------|--------|
| 本郷新彫刻シリーズ 29「九人の乙女の碑」                 | 表紙     |
| 目次 彫刻美術館行事予定                          | 2      |
| 巻頭言「アルテピアッツァとの出会い」                    | 磯田憲一 3 |
| ミュージアムの窓辺から「市民参加で成功した 30 周年記念特別展」     | 佐藤敬爾 4 |
| 札幌軟石の話                                | 岩本好正 5 |
| 市内美術館めぐり日帰りバスツアー印象記                   | 6      |
| 詩「創造都市サッポロ」                           | 原子 修 8 |
| 「大通公園から始まる彫刻めぐり」感想                    | 9      |
| 友の会ニュース                               | 10     |
| 「クラーク博士像すっきり」「浪岡さん短歌作品集刊行」「栃内忠男氏逝去」ほか |        |

### 本郷新札幌彫刻美術館展覧会案内 (2009年10月～12月)

| <b>本 館</b>   | <b>記 念 館</b>   |
|--|--|
| 10月25日まで<br>第 14 回本郷新賞受賞記念彫刻展  | 11月8日まで<br>本郷新賞と本郷新の野外彫刻   |
| 貸 館 10月27日から11月29日まで   | 展示替えのため休館 11月9日—11日  |
| 12月5日—2010年3月28日まで<br>本郷新・平和への祈り—無辜（むこ）の民—<br><br>一般市民が地域紛争に巻き込まれ、悲惨な状況に置かれた 1970 年に本郷は、平和への祈りを込めて「無辜の民」シリーズを制作した。本郷の祈りは 15 点の作品に結実した。 | 11月12日—2010年3月28日まで<br>若き日の本郷新—彫刻家の原点—<br><br>東京高等工芸学校在学中に国画会に初入選入りした「少女の首」など初期の彫刻・絵画を中心に展示。本郷の彫刻家としての原点を探る。 |

**本郷新記念札幌彫刻美術館** 札幌市中央区宮の森 4 条 12 丁目 ☎011-642-5709

◇開館時間：午前 10 時—午後 5 時◇休館日：月曜日（月曜日が祝日などの場合は翌日）◇交通機関：地下鉄東西線「西 28 丁目」駅下車 ジェーアール北海道バス「環 20」山の手環状線 3 番乗り場、「彫刻美術館入り口」下車、徒歩 10 分

「アルテピアッツァとの出会い」

磯田 憲一(北海道文化財団理事長・元北海道副知事)

地域文化に貢献する団体・個人に贈る賞として、北海道が「地域文化選奨」を創設したのは、1993年(平成5年)のことです。道の財政上の理由から「賞金」の予算措置をやむなく断念したのですが、何らかの副賞を模索していた私が、何故か思い立って「美唄」を訪れたのは、賞創設の前年のことです。故郷美唄に一時帰国していた彫刻家安田侃に直訴するためでした。

私の話を聞いていた安田さんは、「地域文化選奨」創設の趣旨に共感し、その場で、大理石の彫刻「妙夢」を10年間寄贈しようと約束してくれたのです。今考えると、何とぶしつけな、おこがましい申し出であったかと赤面する思いですが、この世界的彫刻家は、故郷北海道の地域文化の発展にも、人知れず心からの声援を送ってくれたのです。

約束の10年が経過した時、安田さんは、改めて継続を約束してくれ、今も「地域文化選奨」の副賞を贈り続けてくれています。初めて出会ってから18年、振り返ってみると、人生途上のかけがえのない出会いであったと思うばかりです。

当時から多くの称賛を得ていた安田さんですが、その後の世界各地での展覧会を通じてより声価を高め、2007年秋から2008年春にかけて開かれた「ローマ展」の成功によって、これまでの評価をさらに確固たるものとする事になりました。

安田さんが、日本でアトリエを探していた時に出会ったのは、雑木林の中にひっそりとたたずむ、旧美唄栄小学校の壊れかけた木造校舎でした。1970年にイタリアへ旅立った安田さんが久し振りに再会した故郷の風景、その安

田さんの心をとらえたのは、エネルギー政策に翻弄された美唄の歴史など知らぬげに無心に遊びまわる子ども達の姿でした。その子ども達の笑顔こそが、「アルテピアッツァ美唄」創造への確かなともしび(灯)となったのです。

アルテピアッツァの中央に位置する「水の広場」は、夏はもとより雪の季節さえ子ども達の歓声であふれます。かつて炭鉱街を走りまわっていた子ども達の歓声と、今、無心に遊びに興じる子ども達の声がどこかで混じり合い、アルテの丘にこだまします。それは人智の計算を越えた不思議な響きとなって私たちの胸を打つのです。

2005年8月、この芸術広場を維持運営するNPO法人「アルテピアッツァびばい」が設立されました。厳しい課題を抱えてのスタートでしたが、豊かさの新しい基軸を創造しようという挑戦の始まりでもありました。

25歳で日本を旅立ち、イタリアで大理石という素材にめぐり合った安田さんは、数十年後、再び故郷に「北の大地」という素材を得ました。そして私たちは、安田侃というたぐいまれなアーティストに出会い、日本にも世界にもまれな「アルテづくり」という挑戦の戦列の中にいます。

不思議な「場のエネルギー」を持つこの空間は、訪れた人々の「懐かしい」記憶を呼び覚まし、心を和ませた人たちは、「また来ます」と言って帰途につくのです。「アルテ」の今をお伝えする紙幅はもうありませんが、このかけがえのない空間を、私たちは多くの心ある皆さんの協力をいただきながら次世代にバトンタッチしていきたいと願っています。

## 市民参加で成功した 30 周年記念特別展

市立小樽美術館館長 佐藤 敬爾

市立小樽美術館は今年開館30周年の節目を迎えた。芸術文化の一つの殿堂として多くの画家や彫刻家、版画家を輩出した小樽に、美術館をと開設を願う市民運動が実り、1979(昭和54)年8月、前年に開館したばかりの市立小樽文学館と同居する形で旧小樽地方貯金局(昭和27年竣工、その後市分庁舎に移管)の建物に産声を上げたのである。

真向かいには重厚なルネッサンス様式の日本銀行旧小樽支店(明治45年竣工、現在は金融資料館=平成15年開設)があり、外務省本省も手がけた小坂秀雄の設計によるモダンな美術館と好対照の建造物二つも見応えがあるとの声も聞かれる。敷地に接して旧国鉄手宮線跡地のレールが残され、冬2月に開かれるイベント、「小樽雪あかりの路」の会場となるなど、立地条件にも恵まれている。

美術館の1階は小樽出身の日本を代表する風景画家・中村善策の常設ホールを核にして、2階ホールで年2回の特別展を軸に、約2700点に上る収蔵品を展示する企画展で年間スケジュールを組み立てているほか、秋の市民文化祭には小樽市美術展を開催している。

悩みは事業費がかさむ特別展の開催が小樽市の財政難を背景に厳しい状況に直面していることだ。

開館30周年を飾る記念特別展「画家たちのパリ」展(5月23日～7月20日)は商都小樽の黄金期(大正～昭和初期)に芸術の都パリに游学した長谷川昇、小寺健吉、工藤三郎の三画家に焦点を当て、当時パリで活躍していたユトリロ、シャガール、スーチンら「エコール・ド・パリ」の作家らの作品と合わせて紹介する内容だった。総事業費約800万円規模のものになったが、予算難の壁を経済人を中心とする市民各層による実行委員会方式で乗り切った。当館としては初めての挑戦だったが、前売り券の販売や協賛金、寄付金の募集、図録販売などの協力があり、入館者も目標を大きく上回る5600人超を記録した。入場無料なのにさっぱりだった小中学生の姿がぐんと増えたこともうれしい傾向の一つだった。

もう一つの課題である築後57年という建物の老朽化対策にも光明が見えてきた。山田市長の英断によるリニューアル工事着手への動きである。現在同居する生活安全課が本庁に移転、この建物を周辺整備も含め美術館と文学館のみの施設に特化するプランである。今年の記念特別展開催で実現した市民参加の熱意が引き出した「市長の英断」と確信している。

◇市立小樽美術館 〒047-0031 小樽市色内 1 丁目9-5 ☎0134-34-0035 ◇開館時間 9:30～17:00(入館は 16:30 まで)◇休館日 月曜日(祝日の場合はその翌日)◇あし JR小樽駅、中央バス小樽駅前ターミナルから徒歩 10 分。詳細は美術館へ問い合わせるかホームページ(<http://www6.ocn.ne.jp/~otaruobj>)で確認を。

## 札幌軟石の話

札幌軟石文化を語る会 岩本 好正

私は、札幌は木の文化の国・日本に数少ない石文化を持っている街だと思っています。

軟石採掘の歴史があり、100年以上経った建物が現在でも使われています。しかも、まだ軟石を採掘しており、それは建物の外装に使われています。これは札幌が全国に誇れる文化だと思っています。

札幌軟石は4万年前、支笏火山が大噴火した際に発生した大火砕流が札幌(石山地区)まで流れ、冷えて固まった石(溶結凝灰岩)。

軟石の層の厚さは元の地形によっても違いますが、10㎝から20㎝ぐらいです。上下の層は柔らかく、建物に使われ、中層は採掘する時に火花が出るほど硬く、墓石、こま犬、鳥居、灯ろうなどに使われています。

札幌軟石は明治4年(1871年)、ホーレス・ケプロンの助手として来道したアンチセルとワーフィールドによって発見され、切り出しの記録では明治8年に1985才(注=才は石材の体積の単位で、石<こく>の10分の1。1立方尺=広辞苑)を採掘し、開拓使に納められました。その後、開拓使の奨励もあり、煙突などに使われて普及しました。

現在残っている建物では、明治31年に建てられた北1条東6丁目にあるカトリック北一条教会司祭館が古く、同じ年に建てられた札幌電話交換局は愛知県犬山市の明治村で、明治時代唯一の石造建築物として国の重要文化財となっています。また、札幌市内には多くの建物や造形(灯ろう、こま犬など)が残っていますが、大正15年に建てられた大通にある札幌市資料館(旧札幌控訴院)は造形的にも優れ

た建物で、中央には目隠しをした女神の像も見られます。

この頃の石材店には、石の飾り職人がいて、石山で切り出された軟石を工事現場で加工や飾り細工をしていました。

札幌に残る一番大きな軟石の建物は自衛隊苗穂分屯地に残る明治41年に建てられた、長さ100メートルの「軍馬



札幌軟石で作られた札幌市資料館

用飼料倉庫」で、4棟並んであります。

現在は昭和52年に制定された建築基準法により、組積構造が禁止され、軟石の建物は建てることができません。最近の建物では平成15年、東京・新橋に復元された旧新橋駅の外装に軟石が使われています。

札幌軟石の特徴は、石の中に白い軟石が取り込まれていることです。他の石と軟石を見分けるには、この軟石で簡単に見分けられます。また、冷えて固まる時、上に乗った火山灰の重さのために断面方向に柁目になっていて、採掘する際にクサビを打ち込み採掘しました。

軟石を採掘するには堀切・割出しなどの作業がありましたが、現在は機械のチェーンソーで採掘しています。

明治43年から大正7年までは石山から南1条西11丁目(現在の中央区役所)まで馬鉄で運ばれましたが、その後は定山溪鉄道、昭和33年代になるとトラックでの運搬に変わりました。西11丁目通りが石山通りと呼ばれるのは当時の名残です。

友の会は本年度制作予定のビデオ第6作として、札幌軟石をテーマにした撮影作業を進めています。その関連で岩本さんに執筆をお願いしました。

## 市内美術館めぐり日帰りバスツアー

「札幌第2中学の絆展」、「渡会純价の世界展」に充実感と余韻

### 作者名ない大通公園野外彫刻に虚無感

芸術の森美術館の無料送迎バスを利用した彫刻美術館友の会主催の「市内美術館めぐり日帰りバスツアー」が6月23日に催された。友の会会員の松原安男さんを解説者に大通公園の彫刻群、本郷新記念札幌彫刻美術館で開催中の「札幌第2中学の絆一本郷新・山内壮夫・佐藤忠良・本田明二」展、芸術の森美術館の「渡会純价の世界 心のリズム 奏でるメモワール」「本田明二コレクション」展、芸術の森野外美術館をそれぞれ鑑賞した。印象記を4人の参加者をお願いした。

#### 渡会純价の世界展にシンフォニーの響き

小河原 えり (会員)

今回鑑賞したのは北海道版画界の担い手として活躍を続けている渡会純价の画業50年をたどる展覧会です。展示室は銅版画を中心に油彩や素描などを含む250点の作品で構成され、日々の暮らしや旅先の風景、パリ留学時代、音楽などを題材とした作品が、明るい色彩とリズムカルな描線で表現されています。中でも、オーケストラの演奏風景を題材とした「ON STAGE」や「SYMPHONY」などは、団員が一体となって演奏する様子が

エッチング独自の躍動感ある細い描線で表現され、画面から軽快な音楽が聞こえてくるようでした。鑑賞に入る前に岩崎直人学芸員と渡会先生の対談をお聞きした際、作品を制作する上での信条は「線には詩を」「色にはリズムを」「形には愛を」ですと語っていたのが強く印象に残りました。展示室を出たときには、交響曲を聴き終えたような充実感と余韻に包まれ、内容の濃い盛りだくさんの一日となりました。

#### 街中の野外彫刻を見るにつけても

吉岡 達夫 (会員)

今回に限らず大通公園をはじめ街中の野外彫刻を見るにつけても、一番知りたい作者の彫刻家名が背後に小さく刻んであったり、名さえ無い作品もあり、目立つのは寄贈者や企業名ばかりである（これは全国の野外彫刻にも多く見られる現象ではあるが）。

そこで思い及ぶのは現役時代に仕事柄接することが多かった写真家、特に広告写真家のことである。どんなに優れた写真が主役の広告（もうそれだけで立派な作品である）でも自分の名が載らないことに対する写真家の虚しい思いである。というのも中には他分野の優れた芸術家にも匹敵するほどの、評価されるべき写真家（特に無名に近い作家タイプに多い）が少ないながらも広告の分野でも存在したという事実である。

このような野外作品の彫刻家の中にも刻印名が無いに等しい自分の彫刻に対して同じような思いはなかったのか、それは私一人の思い過ぎしなのか。それともこのような彫刻も広告物と同じというのだろうか。

---

#### 私にとっての札幌二中の絆展

鈴木 貞司 (会員)

本郷新、佐藤忠良、本田明二が私の母校、札幌西高の大先輩であることは知っていたが、山内壮夫については名前すら知らなかった。「札幌第二中学の絆」でくくられた4人の展示を、解説付きで鑑賞できる機会など、めったにあるものではない。その意味でも、仕事を持つ身でも参加できたのは良かった。

佐藤の彫刻はどこに行っても、どんな遠くからでも、そのやさしい作風から「あれは忠良さんだ」と分かるのだが、本郷の作品群はその厳しい思想が私の揺らぐ心にくさびを打つかのように伝わってくる。「わだつみのこえ」「無事の民」など一層その感慨を強くさせられる。本田の「北洋の男」「馬碑」は北の風土を強く印象付け、山内の作品「ソンミの慟哭」からは反戦、厭戦のメッセージを突きつけられ、しばし歩を進めることができなかった。

「4人の絆展」に参加し、4人と同窓である私は誇りにも似た気持ちを抱きつつ会場を後にした。

---

#### 芸術の森を訪ねて

船迫 吉江 (会員)

初夏の爽やかな日に友の会の催しで久方ぶりに芸術の森を訪ねました。

野外美術館で風に吹かれ形を変えたもの、ひたすらたたずむものなどさまざまな造形73点の中に、彫刻のお手本のような佐藤忠良の作品が青空に向かってまぶしいばかりに輝いていました。

その一角に忠良を記念した佐藤忠良記念子どもアトリエがありました。入り口には「おおきなかぶ」のレリーフが設置され、その傍らに忠良が描いた絵本の数々が並び、「おおきなかぶ」も展示されていました。その絵に心温まる思いを抱きました。

記念館に付設された子供アトリエでは、子供たちが制作したブロンズ風の顔が棚に並び、おのおの見事に表情が表現されており、豊かな感性に驚かされました。

また、工芸館展示ホールでは、浅井健一氏らの作品が展示即売されていました。

移動の途中、トドマツの根元で昼食時に話題になったきのこ、「ポルチーニ」を6本見つけ、うきうき気分ですぐに帰途につきました。ポルチーニはスケッチしたあと、おいしくいただきました。関係者の皆様をはじめ、自然に感謝する日でもありました。

創造都市サツポロ

原子 修 (詩人)

創造都市サツポロ

それは

わたし達一人ひとりが  
一本ずつの草になることです

降り注ぐ太陽の光と

北の大地をうるおす水とで

わたしなりの光合成をなしとげ

自分なりの緑のよろこびを創りだすことです

生きがいの葉をしげらせ

いのちの花を咲かせ

わたしなりの人生の実

おのれなりの豊かさを手に入れることです

創造都市サツポロ

それは

わたし達一人ひとりが  
かけがえのない民草となつて

日日の暮らしから

まあたらしい自分をよびさまし

おのれなりの価値を生みだすことです

いつも

わたしなりの珠玉の魂 抱きしめて

試煉の闇 かいくぐり

一人ひとりの曙の光で

北の都を織りあげていくことです



「希望」 林田理栄子 (会員)

五月に行われた友の会主催のシンポジウム「デジタル時代の美術館」でパネリストとして参加された原子さんが朗読した詩を許可を得て掲載しました。



## 「大通公園から始まる彫刻めぐり」に高校生らが野外彫刻の魅力を満喫

友の会の「彫刻鑑賞芸森日帰りバスツアー」(6月23日)にヒントを得て、札幌大通公園ロータリークラブ(高橋宏会長)が高校生を対象にした「大通公園から始まる彫刻めぐり」を8月12日に行った。高校生ら25人が参加、友の会会員の松原安男さんの解説で大通公園をはじめ本郷新記念札幌彫刻美術館、芸術の森野外美術館などを回り、彫刻芸術の魅力にひたった。参加した高校生に感想を寄せてもらった。



### 巨大な立像に衝撃

札幌開成高校2年

中島啓貴

この彫刻めぐりに参加して、大通公園は本当にたくさんの芸術作品であふれているのだなと実感した。札幌に長く住んでいたのに大通公園にこんなに彫刻があるなんて知らなかったのだから、驚きの連続だった。また、解説を聞き、それぞれの像にはさまざまな思いが込められているということが分かった。

彫刻美術館では自分たちの3倍以上もある高さの立像に圧倒された。立像は等身大のものと思い込んでいたので、巨大な立像は衝撃だった。また、今にもしゃべり出しそうなおじいさんの顔の像や美しい女性の像について見入ってしまった。それぞれの像は細部までリアルに彫り込んであって、まるで生きているようだ。

さまざまな彫刻を見て、芸術は奥が深いなあと感じ、美しく、不思議な形の彫刻にとても魅力を感じた。人の像の顔をのぞき込んでみると像が何かを訴えかけてきた。また、彫刻と同じポーズをとってみたい、彫刻を作るところを想像してみたりするのがとても楽しかった。

素晴らしい彫刻にたくさん触れることができ

とてもうれしかった。これからはたくさんの芸術に触れ、美しいものをたくさん感じたい。

### 自然と芸術の共存空間

市立札幌大通高校 林 礼/十河 優子

今回、私たちは学校の紹介で「大通公園から始まる彫刻めぐり」というツアーに参加しました。ツアーは勉強になることが多く、芸術をめぐる豊かな感性、また、人生の引き出しを育むとてもいい経験だったと思います。

大通公園にある数々の彫刻たち。今まであまり注目もせず通り過ぎていたものが、実は価値のある素晴らしいものだったと知りました。そして本郷新記念札幌彫刻美術館で彫刻の奥の深さを感じ、芸術の森野外美術館では自然と彫刻、いえ、芸術が共存する空間が、こんなにも心地よいものだと気づかされました。どの作品も、ともすれば引き込まれそうな、今にも動き出しそうで、すっきり魅せられてしまいました。

最後に、この機会を与えてくださった関係者の皆さんに深くお礼をしたいと思います。本当にありがとうございました。

**クラーク博士像すっきり**羊ヶ丘展望台**札幌観光協会の依頼で友の会が清掃**

今年開設50年を迎えた羊ヶ丘展望台の「クラーク博士像」が記念イベントを前にした9月17日、日ごろの汚れを洗い流し、すっきりした。

清掃作業は施設を管理する札幌観光協会からの依頼で友の会会員35人が行った。高さ5メートルほどの銅像に足場を組み、丁寧に水をかけながら汚れをふき取るとクラーク像もさっぱりした風情。きれいになったクラーク像をバックに、観光客たちが早速記念撮影をしていた。

**浪岡さん短歌作品集「未完」刊行**

会員の浪岡豊明さんがこのほど自作の短歌を集大成した作品集「未完」を上梓した。

2001(平成13)年から08年まで、浪岡さんが参加する高齢者の生きがい作りに取り組むNPO活動の中で体験したさまざま見聞を詠んだ作品を収めている。

「無辜の民」

農民の体を彫りし像に来て

本郷の呻吟ここにききおり

**ギャラリー案内****■第46回 OKUI MIGAKU ギャラリーコンサート**

「秋に贈るショパンの調べ」10月11日(日)

15:00開演。出演：坂田朋優(ピアノ)

**■第47回 OKUI MIGAKU ギャラリーコンサート「百留敬雄無伴奏ヴァイオリンリサイタル」**

11月23日(月) 15:00開演。出演：百留敬雄(ヴァイオリン)

△入場料＝一般1500円、学生1000円、中学生以下無料△予約申込み 札幌市中央区旭ヶ丘5-6-61 OKUI MIGAKU ギャラリー  
TEL011-521-3540

**友の会終身会員・全道展会員****栃内忠男氏逝く**

本道画壇の重鎮として美術界に貢献した全道展会員で友の会の終身会員だった栃内忠男さんが9月10日、亡くなった。85歳。

栃内さんへの思い出を斎藤美年子副会長につづってもらった。

2歳の時から世界美術全集を見ながら絵を始められたそうですが、旧制北海中学時代のころ、傘で右目を負傷しても絵に対する意欲を失うことなく絵画の道に進まれたと聞いております。昭和55年、アートギャラリーさいとう(現さいとうギャラリー)開設1周年記念で「愁」展を開いていただいて以来の長いお付き合いになりました。目のご不自由を乗り越えて独自の絵を描き続けられ、「僕は絵を描くために生まれてきた。好きで、好きでたまらないから毎日絵筆を執る」とお会いするたびに語られていたことは敬服のほかありませんでした。

ご冥福をお祈りします。

**訃報** 手島睦子さん(終身会員)6月30日

**2010年新年会は1月30日に決定**

来年の友の会新年会は1月30日(土)午前11時から「さっぽろ・すみれホテル」で開催することに決まった。会費など詳細は次号に掲載予定。

**札幌彫刻美術館友の会会報「いずみ」No.29**

2009年10月1日発行

発行 札幌彫刻美術館友の会事務局

(札幌市中央区南9条西4丁目7-1-1003)

発行人 橋本 信夫

編集スタッフ 斎藤美年子：011-643-7246

大内 和：011-884-6025